

1 図画工作科における知識創造とは

造形とのかかわり

私たちの身の回りには、すばらしい造形の世界が広がっている。しかし、既にすばらしい世界があり、その世界を私たちが享受しているのではない。私たちは、目の対象から造形的なよさや美しさを感じたり、それに基づいて考え、表現したりしている。この造形から働きを受け、働きかける双方向の関係によって、すばらしい造形の世界を自らが広げ、つくり出しているのである。図画工作科では、この双方向の関係を「造形とのかかわり」ととらえた。

造形に対する 価値観

その造形とのかかわりを支えるものは、一人一人に内在する造形に対する価値観（以下「価値観」とする）である。どのようなものによさや美しさを“感じる”か、どのように“考え、表現する”かという「価値観」が、広がり、更新されることで、造形とのかかわりが豊かで新しいものになっていく。

図画工作科の役割

図画工作科の役割は、子どもの実態に応じて、意図的、計画的に造形との出会いをつくり、子ども一人一人の「価値観」を大切にしながら、造形とのかかわりをより豊かで新しいものになるよう支援していくことである。そして、そうした造形とのかかわりを通し、子どもは、自分の思いや夢を色や形に託して実現させることに喜びを味わう。

*1 「自分にとって新しいもの」とは、これまでの自分をふり返り、更新をくり返しながらかみ出した、自分にとってこれまでにない「感じ、考え、表現したこと（行為も含める）」を指す。
「自分ならではのもの」とは、他とのかかわりの中で自分が育み、見いだした他の誰とも同じではない「感じ、考え、表現したこと」を指す。
(本校紀要第59集)

子どもは、既存の「価値観」をもとに造形とのかかわっていく。そして、他の様々な「価値観」との出会いの中で自らの「価値観」を広げたり、様々な「価値観」とつなげる中で自らの「価値観」を更新したりしていく。常に広がり、更新された「価値観」をもとに自分の思いや夢を実現させていくのである。これは「ひと」「もの」「こと」の背景にある様々な「価値観」との出会いの中でこそ実現されていくものでもある。そして、一人一人の「価値観」がより豊かで新しい造形とのかかわりを生み、集団としての「価値観」を広げていくのである。このくり返される営みの中で、自分の思いが実現され、自分にとって新しいもの、自分ならではのもの*1がつくり出されていく。

これらの考えをもとに、私たちは図画工作科における「知識創造」を以下のように定義した。

図画工作科の 知識創造

自分の思いを実現させていく中で
様々な「価値観」と出会い つながりながら
自らの「価値観」を広げ 更新する営み

2 図画工作科における「かかわり」の活性化とは

図画工作科における「かかわり」の活性化とは、自分の思いを実現させるために、今の表現でよいのかと自問自答し、互いに様々な感じ方、考え方、表現の仕方を求めている状態であると私たちはとらえている。

3 「かかわり」を活性化するために

(1) 比較を通して「かかわり」を求める思いを高める

*2 ここでいう「自分」「他」とは、それぞれが「感じ、考え、表現したこと（行為も含める）」を指す。その背景には、それぞれの「価値観」が大きくかかわっている。

「かかわり」を求める思いを高めていくために、常に「比較」という視点を大切にして学習を展開する。その視点は今の自分を中心とした次の3つに集約されると考えている*2。

- ①「今の自分とこうなりたいと願う自分」との比較
- ②「自分と他」との比較
- ③「今の自分と前の自分」との比較

これらの視点によって、つくり、つくりかえ、つくりつづける自分を認識することができる。それは、他はどうなのだろうという思いと自分の思いを実現させる意欲を喚起し、より充実した知識創造をうながしていくだろう。

(2) 知識創造のプロセスを意識し 4つのステージを設け 有効に機能させる

*3 図画工作科では、知識創造の4つ(想起・表出・共有・結合)のそれぞれモードの中にも、4つのステージを意識し、「かかわり」を創出していく。ここでの4つのステージはそれぞれが独立し、順序立てて流れるとは限らない。互いに関係し合い、あるステージが繰り返されたり、不連続にジャンプしたりする場合もあると捉えている。
(本校紀要第56～59集)

*4 例えば、表現のための時間や空間の保証、必要な材料を自由に使える環境、表したいことに合わせた材料や用具の扱い方の提示である。

*5 最初に発想し、構想してきたことと比べてどうなのか、部分だけではなく全体としてみた場合どうなのか、今の自分でまだ試みられることはないのかなどを観点とする。

*6 この相互鑑賞は、エ、とも関連し、自己評価活動の一つに位置づけている。相互鑑賞の際、例えば、鑑賞カードとして複写式メモパッドを適宜使用する。複写式なので、表現や取り組み方のよさを捉え記述したものは、その場で相手に渡すことができ、自身の手元にも残りふり返ることができる。

*7 自己評価活動には、三つの段階があると考えている。

ア 自己達成評価
イ 相互評価
ウ 自己客観評価
(本校紀要第56集)
その方法としては、自らの感じたこと、考えたこと、表現したことをふりかえりカードや作品カード、作品の写真(途中過程も含めて)、相互鑑賞カードなどを用いて記録したものを活用していく。

知識創造にかかわる4つのモードを意識しながら、自分の思いを実現させていくために、一人一人の「価値観」の表れを中心とした4つのステージを設け、有効に機能させていく。

ア. 既存の「価値観」をもとに造形に働きかけ 自分の思いや意図をもつステージで

まず、表現への期待と、様々な表現を試そうという意欲をもとに自分の思いをもつことが必要である。そこで、働きかける対象は子どもにとって興味や関心を引くものであること、その造形によさ・働きかける行為の楽しさ・行為の結果生まれるよさを十分に感じられることを大切にしながら造形との出会いをつくっていく。そして、さらに多様な表現の可能性を感じ取れるようにするために、働きかける対象から、それぞれが感じ、考えたことを表出し合う場を設ける。そこから、新たな、またはこだわりを認識した自分の思いや意図がつけられることになる。

イ. 自分の思いに合わせて 感じ 考え 表現するステージで

自らの「価値観」をもとに、自分の思いを実現させるための活動に教師も共感し、より積極的に表現に取り組めるように学習環境を整える*4。そして、それぞれの思いや意図を把握し、個々の「価値観」が集団で認められるような場をつくることで自分の思いの実現を支援していく。また、一人一人の提案や悩みを集団に広め、受け止められるような場をつくることで、共に造形との新しいかかわりをつくり上げていこうとする集団の意識も高めていく。

ウ. 自分の「価値観」と他の様々な「価値観」を関連づけて

価値観を広げ 更新するステージで

ジで

子どもは、感じ・考え・表現し、様々な造形とのかかわりから、また感じ・考え・表現し…と、不断にその結果を受け止め、判断しながら表現している。子どもの中では常に自分を見つめることが行われているが、ともすると狭い見方になる場合もある。そこで、造形活動の過程で、一人一人がその後の表現の指針となるものをもつことができるように、自分の表現を見つめ直す*5場を設ける。また、相互鑑賞する機会も適宜設け、互いのよさや表し方の工夫について、認め合い、アドバイスし合う*6。その中から、友だちの表現や取り組みからも自分にはないよさや美しさに気づき、「価値観」を広げたり、更新したりしていくだろう。そうして関連づけられ新しくなった価値観で、子どもは、自らの表現を見直し、つくり、つくりかえ、つくりつづけていく。

エ. 自らをふり返り 今の自分の価値観を認識するステージで

これら一連の造形活動の途中、そして最後に自己評価活動*7を取り入れ、自己の学びを確認すること、またその要因を探ることを大切にしたい。

自己評価活動を通して、自分の思いの表れや「価値観」の変容を明らかにしていくことができるだろう。そこでは、表現の過程の中に点在する自分らしい表現のよさを見つけつなげたり、悩んでいたこと、それが解決に向かう過程、変わっていった自分をふり返ったりすることになる。そして、それらを交流し、よさをつくり上げることができた要因を話し合う中で、働きかけ、働きかけられた、ともに学ぶ姿も大切な価値として位置づけさせたい。

子どもが自分の思いを実現させていく過程は、ふりかえりカードの記述からも、一人一人の前の表現と今の表現の比較からも見取ることができる。「ひと」「もの」「こと」とのかかわり合いの中で、一人一人の子どもをとりまく場や素材、表現されたものが、その子どもの新たな表現を誘い出すものとなる。そうして絶えず変化していく表現を注意深く見守り、思いのよさの表れを認めていく。また子どもが発する言葉、つぶやき、悩む表情、笑顔、表現に没頭している姿など、その瞬間その子どもにながら起こっているのかも大切にしてみ取りを行い、声をかけながら、子どもの中の変容をとらえ、フィードバックしていく。それらの教師の働きかけも自らの変容を明らかにする相互評価として、自己評価活動を支えるものになっていく。